

秀吉の夢、もののふたちの野心、

人々の暮らしと命への願い……、

美しき月光の下、

さまざまなドラマが

通り過ぎていった川、高時川。

歴史の証人・高時川



高時川は今も昔もただ黙々と静かに流れ続けています。
しかし、高時川を横切っていった「歴史」は、
決して平和で平凡なものばかりではありませんでした。
その静かな姿からは想像もつかない「ドラマの舞台」だったと言ってよく、
つわものどもの夢や人々の暮らしを支える物資が行き交い、
治水と利水のため多くの人たちの汗と涙が流されてきた川なのです。
「歴史の証人」でありながら語ることをできない高時川に代わって、
高月町観音の里歴史民俗資料館学芸員の佐々木悦也さん、
古文書に詳しい宮澤義夫さん、そして地元の古老・松井助三さんの
三人に語っていただきました。



豊国神社のご神体

森本神社の境内にある豊国神社は秀吉による森本大
夫への課役免除を感謝して祀る。



つわものどもが駆け抜けた 「北国脇往還」

高時川とその流域は、戦国の昔から北陸と東海を結ぶ交通の要衝であり、同時に北に浅井氏の小谷城があることから軍事的にも重要な地でした。特に、ここを通る北国脇往還という道の存在が大きいと、佐々木さんは指摘します。

「北国脇往還とは北国街道の本々本宿と中山道の関ヶ原宿を結ぶ脇街道ですが、東海と北陸を結ぶ最短路だけに、北国街道以上に利用されたと言われている道です。現在は国道三六五号線として人々の暮らしを支えています。」

関ヶ原の戦いのときは、西軍の敗走路にもなりましたし、江戸時代に北陸諸大名が参勤交代で利用したのもこの道で、このあたりでは北国街道（現国道八号線）を「京街道」、脇往還を「江戸街道」とも呼んでいました。

この天下の回廊とでも言うべき地を、戦乱のたびに武士たちが駆け抜けていきました。



佐々木悦也さん

高月町観音の里 歴史民俗資料館学芸員。

秀吉も北国脇往還を 使って支配を固める

あの秀吉が天下人への最初の「拠点」としたのもこの地。天正元年九月、織田信長が浅井氏の所領を羽柴秀吉に与えたことに始まります。

最初、秀吉は浅井氏の居城だった小谷城にいましたが、民政に適した土地でないとして翌年今浜に移り、その地を長浜と改めて城を作り、城下町を整備しました。

秀吉がこの地の支配を決定的なものにしたのは、天正十一年（一五八三）、越前の柴田勝家との賤ヶ岳の戦いで勝利してからのこと。

賤ヶ岳の戦いのために、大垣から急ぎよ「大返し」で戻る秀吉は、北国



松井助三さん

長く北富永村（昭和二十九年に高月町に合併）の助役を務め、高時川右岸の水利委員長、湖北土地改良区の理事、井口区の水利委員長などを歴任。86歳。

脇往還を馬で駆け抜けました。一説では街道沿いの村々に炊き出しを命じ、沿道にはかがり火をたかして走り抜けたと言います。

一行がかつての森という在所（現高月町馬上）あたりに差し掛かったとき、秀吉が聞きました。

「ここはどのあたりじゃ」

「北マケ（北馬上）でござりまする」

「北（柴田勝家）が負ける北マケとな。」

なんとげんのよい。この戦、勝った！

秀吉はこのほかに喜び「北マケ」と言っただけにとらえたと伝えられています。「このあたりの称名寺（現浅井町尊勝寺）の坊さんが道案内に行っているわはったという話や」と松井さんは言います。



「民政の要諦は治水・利水にあり」と見抜いた秀吉

秀吉がこの地を治めるにあたって留意したのは治水・利水でした。長浜入城の際に発した「触書」の中に次のような一節があります。

「二、在々所々つつみの事、堤下の物申すにおよはず、隣郷の百姓も罷出普請すへき事」また、浅井氏滅亡後、直ちに秀吉の家臣・早川長政が「油断なく井水普請を行おう」と高月村住人に命じています。

この地を治める要諦は治水・利水にあり……秀吉はそのことを見抜いていたのでしよう。今でも「太閤堤」と呼ばれる堤防のことが語り継がれているのはその名残。

『近江伊香郡志』には次のような記述があります。

「高時川の右岸、北富永村の地先なる高橋山と、下井川とを結合する直線約五十間の堤防、南富永村地先なる大字柏原、渡岸寺、落川の東方に位する延長約二百間の堤防、及び大字高月の東方約三十間森本の東方延長約四十間の堤防は、古来秀吉の修築せし所なりと口伝せられ、現に太閤堤の名あり」

ただ、残念なことに、いつ、どのよう



湖北町丁野にのこる太閤堤(点線は大閤堤)

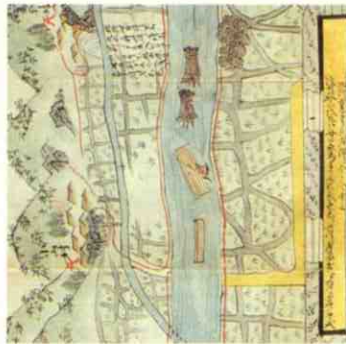
な経緯で作られ、いかにして太閤堤と呼ばれるようになったか……などはほとんど分かっていません。実際の堤も高月町ではほとんど残っていません。「ほ場整備までは一部残ってたんやけど」と松井さん。

水量多く、 暴れ川だった高時川

治水が重要……ということは、それだけかつての高時川が「暴れ川」だったことを意味しています。

実際、かつての高時川は、上流の山で切り出した木をいかに組んで流せるほど豊かな水量の川だったのです。

「わしらが小学校に通つところまで『木流し』が盛んに行われてました。『流



雨森郷絵図
高月町指定文化財
江戸時代後期の作と思われる。
芳洲会蔵

しが行きよる」と聞いては見に行つたものです。長いものは五十mほどのいかだで、先頭と末尾に腰弁当とサオを持った船頭がいて、いかだを上手に操っていました」(松井さん)

米の運搬も高時川が主役

水量が多いため、かつては米も川を通じて運ばれていました。宮澤さんは言います。「水をかぶるのを嫌がる米でさえ、江戸時代は川を使って運ばれていました。ほかに重量物を運ぶ手段がなかったからです。途中で水をかぶると持ち帰って干したのですが、それはもう年貢として納められない。そこで隣村から米を借りて納める。翌年、不作だと借りた米が返せず、大変なことになったと古文書にあります」

地元土豪も 治水・利水で出世

この地の土豪が歴史の表舞台に参加するまで「出世」したきっかけも治水・利水でした。高月町井口の井口氏がそれです。元は近江佐々木氏の一族、東条氏。文永七年(一二七〇)、大蛇を退治して国中のかんばつを救い、その霊を井大明神に祭つて氏子となり井口姓を名乗ったのが最初と言います。中世以降、井口弾正越前守が高時川預(井奉行)となつて用水井堰を管理しました。井口弾正の娘は井水のための人柱となつて湖国を救つ



宮澤義夫さん

高月町議会議員、滋賀県議会議員などを経て、現在、宮澤酒造(有)取締役。歴史と古文書に詳しく、現在は町史編纂準備委員長を務める。69歳。

「石」を買ってまでして 堤を整備

江戸時代、余呉川の河口・尾上村では、漁業はもとより「石の運搬」も盛んでした。これも治水がいかに重要だったかの証拠。

「多分、尾上村から出た湖上用の船が御普請の堤防構築に使う『石』を対岸の向山から南浜まで運び、そこから姉川・高時川を遡

上させるために船底の浅い川舟八そうに積み分けて柏原まで引き上げたのでしよう。一そうの船賃は銀五匁で計四十匁、一坪の石は十七匁五分、船賃共で銀五十七匁五分であつたそうです。『蛇力ゴ』に入れるための栗石だったのかもしれない」

さらに宮澤さんは言います。

「重量物を流れに乗って下へ送るだけでなく、さかのぼって運ばれた点も重要です。石やさまざまな重いものが下流から上流へ船を使って運ばれました。これは『文化』が川を伝つて遡行をしたことを意味します。川は文化の伝導にも大きな役割を果たしていたのです」

今は静かな姿の高時川ですが、歴史を振り返れば、戦乱のたびに武士が川沿いを走りまわり、平和なときは平和なときで治水・利水に人々が心を砕いてきたことが分かります。



太閤秀吉の幸若舞大夫へ宛てた文書
森本舞々大夫並陰陽之大夫共之事。人夫等之儀令免許候。
若此一在所之内、或侍衆或百姓等雖為一人相拘二をひては、任請状之旨可加成敗者也
三月二十七日秀吉
もりもと大夫中

以後、井口家は浅井氏の重臣「湖北の四家」の一つとなり、戦国時代に大活躍することになります。井口弾正元元は箕浦河畔の戦いで浅井亮政の身代わりとなつて亮政の命を救つたことなどから、亮政は井口家を重用、経元の娘を嫡男・久政の室に迎えたほど。その子供があの有名な浅井長政です。